

バレーボールの競技特性に関する研究

—差異論的アプローチによる定義化の試み—

高根 信吾*

Study of the Distinguishing Competitive Characteristics of Volleyball —An Attempt at definition by the difference-theory approach—

Shingo TAKANE*

Abstract

Little attention has been paid to the distinguishing competitive characteristics of volleyball, despite the importance of this issue. This study treated these characteristics as “the special characteristics that distinguish volleyball from other sports.” The purpose of this study was to clarify the distinguishing competitive characteristics of volleyball. The definition of volleyball, which describes these characteristics, is as follows: “Volleyball is a sport played by two teams on a playing court divided by a net, within the limit of three hits in the team allowed before sending the ball to the opponent’s court, they repeatedly attack by aiming to have the ball contact the ground on the opponent’s court, repeatedly defend against the same attacks made by the opposing team, and compete for a point obtained by winning a rally.” This study concluded that the symbolic moving form emblematic of volleyball is the “spike,” a typical scoring skill. The reason was the attack-point by spikes results in the highest number of points achieved in volleyball games.

Key Words: distinguishing competitive characteristics, definition, difference-theory approach, spike
競技特性, 定義, 差異論的アプローチ, スパイク

I. はじめに

バスケットボールの競技特性に関する研究の第一人者である内山は、バスケットボールの競技特性を考察する研究において、「競技としての本質的な在り方について共通認識を持つこと」は、「競技としての魅力を明らかにしたり、他種目とは異なる競技力を特定し、それを世界水準へと至らしめる手立てを講じるために(略)重要である」と指摘し、そして、「魅力や競技力といった、バスケットボールの競技としての本質的な在り方に関わる事項にアプローチするには、何よりもまずその対象を明確にしておく必要がある」とし、「バスケットボールというスポーツ自体が(略)他と比してどのような特性を有しているのかを理解しておくことは必須の要件であると考えられる」と主張している。しかしながら、「バスケットボールの有する独自の特性が分からないことには、このスポーツに固有の魅力や競技力を特定することなど不可能」であるにもかかわらず、「従前より明確に且つ詳細に規定され提示されてきているはずの」競技特性について、「現状は混沌とした様相を呈してしまっている」と現状を批判している。そして、日本バスケットボール協会が編集した「教本」^{脚注1)}の冒頭の「バスケットボールの特性」に記されている『バスケットボ

ール競技は、ボールの所有とシュートの攻防をめぐり、相対する2チームが、同一コート内で同時に直接相手と対峙しながら、一定時間内に得点を争うゲームである』という言明において、そこでの『バスケットボール』を『サッカー』に置き換えても何等違和感はない」と指摘し、その言明がバスケットボールの「『特性』を何等言い当てていない」と批判する²⁷⁾。それは、バスケットボールの特性というならばバスケットボールの同位概念であるサッカーとの差異を明確にする必要があるにもかかわらず、それがなされていないという批判であろう。たしかに、「ボールの所有とシュートの攻防をめぐり、相対する2チームが、同一コート内で同時に直接相手と対峙しながら、一定時間内に得点を争うゲームである」という言明では、内山が指摘したようにバスケットボールとサッカーだけでなく、ハンドボールや水球といった多くのゴール型スポーツ全般に当てはまり、この言明だけをもって「バスケットボールの特

^{脚注1)} 内山が取り上げた「教本(公益財団法人日本バスケットボール協会(編)(2002)バスケットボール指導教本)」については、現在、改訂版が出版されており、改訂版では、「バスケットボールの特徴」として、10項目挙げられている²⁹⁾。
▶2つのチームが一定の競技時間内で得点を争うゴール型のボールゲームである。
▶ゴールは、3.05m(10フィート)の高さに水平に設置された直径45cmのリングとネットからなるバスケットである。(以下、省略)
このように、改訂版では、以前の言説では見受けられなかった「ゴール」についての記載がなされているが、特徴の10項目の中にシュート(もしくはショット)の記載はみられなくなった。

*: 常葉大学(Tokoha University)

(受付日: 2020年12月4日, 受理日: 2021年3月25日)

性」をあらわしているとは決していえないのである。

筆者はこの内山の主張に共感し、本研究の関心事であるバレーボールにおいても同様であると認識している^{註1)}。そこで、バレーボールの競技特性とは何かという非常に重要でありながらも、これまで等閑視されてきた問題について、本研究では、その特性を「バレーボールだけが有する、他と異なった特別の性質」と規定し、バレーボール独自の特性は何かという本質的課題を明示することを目的とする。本研究でこのようなバレーボールの概念的検討を行う理由のひとつは、今後、本研究で明らかとなったバレーボールの競技特性をベースとして、競技としてのバレーボールや教材としてのバレーボールを念頭に置きながら、中学校や高等学校における体育科の授業で活用する教材開発を企図しているからである。高等学校の学習指導要領には、教科の目標のひとつとして、「各種の運動の特性に応じた技能等及び社会生活における健康・安全について理解するとともに、技能を身につけるようにする」¹⁵⁾ 脚注²⁾ ことが挙げられており、この目標の達成のためには、すなわち、体育科の授業において生徒が「各種の運動の特性に応じた技能」を身につけるためには、授業者によって有効な教材が開発され、それを実践する必要がある、さらに、その前段階として「運動の特性」を明確にすることが求められる。例えば、バレーボールの授業を想定し、授業者が実際に着手しうる順に列挙すれば、①バレーボールの特性を明確にする、②その特性に即した教材開発を行う、③その教材を授業において実践する中で、生徒に特性に応じた技能を身につけさせる、となる。

バレーボールという競技種目の確たる位置づけのためには、多くの研究者によるバレーボールの本質的課題における議論を重ねて精度を高めていくという営為が欠かせない。本研究は、その端緒となるべく、また、後に企図している教材開発研究の前提となる本質的な概念的検討として、「バレーボール独自の競技特性は何か」を明示したい。

II. 研究の方法

本研究では、先達に倣って差異論的アプローチを研究方法として採用する。差異論的アプローチとは、佐藤研究を参考にして内山が上述した研究において採用した研究方法である。佐藤は、「スポーツは実体的な運動文化財のひとつである」とし、より簡略化し、命題化した表現として「スポーツは文化である」としている^{註2)}。そして、スポーツの概念的検討において、「スポーツについては、実体カテゴリーに依る文化論的接近法が有効である」と指摘し、そして、「『スポーツは文化的価値が低い』ということが暗黙の前提とされ」、「さまざまな文化財を価値の高いものから低いものに至る一元的序列化によって評価を下そうとする」「価値階層論」に対し、「おのおのの個別的な文化間に形

態的差異のみを認める立場」を「差異論的文化論」とし、この差異論的文化論の立場に立つ時、「文化のひとつとしてあるスポーツが他の文化とどのように異なるのか、スポーツ独自の文化的特性とは一体どのようなものなのか」という課題に対して接近することが可能となると指摘する¹⁸⁾。つまり、スポーツとは何かという概念的検討のために有効な方法は、スポーツの同位概念である他の文化との差異を明らかにすることである。従って、この差異論的アプローチという研究方法は、本研究の関心事であるバレーボールの概念的検討においても有効であろう。

差異論的アプローチによる同位概念との差異を明確にすることではじめて考察対象の概念的検討といえるのであるが、同位概念との差異とは「種差」のことである。ここで簡単に種差について定義と絡めて説明する。定義とは、「AとはBである」という形式を用いた、本質を表現する命題である。その際、Bの部分には、最近類（対象を種として含む類）と種差（対象を他の種から区別する特徴）が含まれる。一般に、定義をする上で必要な要素は「類と種差」といわれるが、定義を日本語で表す場合には、種差→類という順になる。例えば、椅子の定義は、「椅子とは座るための家具である」となる。椅子の場合、「家具」が類であり、「座るための」が種差である。他の家具である机や棚と異なる椅子の特徴が「座るための」である。そして、本研究の考察対象であるバレーボールの定義の場合には、類は「スポーツ」を用い、種差にはバドミントンやバスケットボールとは異なる、「バレーボールの独自の競技特性」が入ることになる。

差異論的アプローチは、「同の中に異をみる」という方法であり、具体的には、「類における共通部分を把握しながら、同位概念との差異を種差として指摘する」ことによって、本質的課題を明示することが可能となる^{註3)}。そして、「定義」はその構成要素として類と種差を含み、簡潔かつ明確に「同位概念との差異」を提示できる。従って、差異論的アプローチは、「バレーボールにおける定義」を試みるためには得策であるといえる。

III. 用語の限定

・アタック（アタックヒット）

競技規則（ルールブック）では、アタックヒットとなっているが、本研究では、アタックと表記する。アタックとは、サーブとブロック以外の相手コートへの返球である。多くの場合、チームの3回目のヒットであり、「代表的なスコアリングスキル」¹²⁾であるスパイクが用いられるが、パ

脚注²⁾ ちなみに、中学校学習指導要領における、同様の箇所では、教科の目標のひとつとして「各種の運動の特性に応じた技能等及び個人生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な技能を身につけるようにする」¹⁴⁾が挙げられている。

スによる返球であってもルール上はアタックである。また、日本バレーボール協会が編集した「教本」では、アタックは、「相手コートへボールを返球するプレイの総称」⁶⁾とあり、アタックの中でも「大半を占める」¹²⁾スパイクについては、「ジャンプしてボールをたたくように打ち込むアタックのこと」⁶⁾としている。アタックは、「一般的に『スパイク』を指すことが多い」²⁴⁾が、アタックという用語はスパイクやフェイント、パスなどを用いた相手コートへの返球動作全般を指し、厳密には、スパイクとは区別すべきである。

IV. 類としてのスポーツ

内山がバスケットボールの類概念を「ボールゲーム」としていたように、バレーボールの類概念もボールゲーム(以下、球技)とすることも、より限定すればネット型球技とすることも可能である。しかしながら、本研究ではバレーボールの類概念として「スポーツ」を採用する。なぜなら、厳密な定義のためには、対象を種として含む類のうちの最近類、つまり、対象に最も近い類を選択すべきであるが、現実的には、明らかにしたい対象の程度にあわせて定義を行う場合には、その程度の類を設定することも許容され、本研究の関心が「バレーボールがどのようなスポーツであるのか」にあり、「バレーボールがどのようなネット型球技であるのか」、すなわち、バレーボールがバドミントンやテニスなどのネット型球技と何が違うのかということだけにあるのではなく、一般的なスポーツ競技全般の中で、バレーボールがどのような競技特性を持っているのかにあるからである。内山も類概念を「ボールゲーム」としつつも、他の箇所では、「バスケットボールとはどのような特性を有するスポーツなのか」²⁷⁾脚注³⁾など、それぞれの文脈において「スポーツ」「競技」「種目」を使い分けている。

V. バレーボールの競技特性^{註4)}

内山は、バスケットボールにおいて、シュートを「シンボリック運動形態」とし、バスケットボールの競技特性について、「頭上の水平面のゴールにボールを入れるシュートの攻防を焦点として、個人やグループあるいはチームが同一コート上で混在しながら得点を争うこと」²⁷⁾としている。この競技特性に関する言明は、前述した教本に見られる「バスケットボール競技は、ボールの所有とシュートの攻防をめぐり、相対する2チームが、同一コート内で同時に直接相手と対峙しながら、一定時間内に得点を争うゲームである」という曖昧で不十分な競技特性に関する言明に対して、内山が批判的検討を加えて明瞭に提示したものであり、バスケットボールの定義における「種差」にあたる部分である。

本研究では、内山に倣って、バレーボールにおける「シンボリック運動形態」および「競技特性」を明らかにした

い。結論からいえば、バレーボールの競技特性をあらわすバレーボールの定義は以下ようになる。

バレーボールは、相手コートへの返球までに許容されるチーム内における3回以内のヒットという制限の中で、ネットを挟んで相対する2つのチームが、相手コートにボールを落とすことを目指すアタックによる攻防を繰り返す、ラリーに勝つことで得る得点を争うスポーツである。

バレーボールの定義は「バレーボールは、○○なスポーツである」という命題形式となり、「○○な」の部分が種差であり、独自の競技特性である。ここでは、バレーボールの定義における種差について考察を進める。

相手コートへの返球までに許容されるチーム内における3回以内のヒットという制限の中で

バドミントンなどの他のネット型スポーツにはみられないバレーボール独自の特性が、この「ヒットが3回まで許容されている」ことである。バドミントンなどのゲームにおいては、シングルスでもダブルスでも自コート内で2回のヒットがあった場合は反則^{脚注4)}となるが、バレーボールでは、許容された3回以内のヒットの中で「攻守のトランジション」が行われ、多くの場合、1回目のヒットが「レセプション」や「ディグ」という守備的ヒットで、2回目のヒットが「セット」という攻撃のお膳立てをするヒットとなり、3回目のヒットが「スパイク」という攻撃的ヒットとなる^{脚注5)}。このように、返球までのヒット許容回数が3回となっているため、バレーボール特有の「三段攻撃」が可能となる。そして、ネット高が指高より高く(男子2.43m、女子2.24m)設定されているため、より攻撃的な返球のためには高くジャンプしてボールヒットすることが求められる。

また、ボールヒットという点においてもバレーボールの独自性がみられる。競技規則では、「ヒットとは、インプレー中の選手によるボールへの接触」であり、身体どの

脚注3) また、「バスケットボールというスポーツ(p.29やp.37)」「バスケットボールがどのような競技であるのか(p.35)」「この種目(p.38)」などという表記もある。

脚注4) 2回連続のヒットに関しては、バドミントンではダブルタッチ、卓球とテニスではダブルヒットという反則となる。例えば、バドミントンの競技規則では、「第13条 フォルト」において、「(インプレーのシャトルが)同じプレーヤーによって2回連続して打たれたとき」「プレーヤーとそのパートナーによって連続して打たれたとき」とされている⁸⁾。

脚注5) トランジションとは、「1つのラリーの中で、攻守が入れ替わる場面」である。「相手のアタックを受けた直後のアタック」を「トランジション・アタック」とし、「相手のサーブを受けた直後のアタック」である「レセプション・アタック」と区別することもあるが、本研究では、相手コートへの返球までに許容される3回のヒットの中で見受けられる、レセプションやディグといった守備的局面からスパイクという攻撃的局面へと至る一連の「切り返し」をトランジションとする¹⁶⁾。

表1 Vリーグ2019-20シーズン男女ファイナルにおける4チームの技術成績および総得点に対する各得点の割合

			総得点	アタック得点	ブロック得点	サーブ得点	相手失点による得点
男子 優勝	ジェイテクト STINGS	点数	108点	68点	8点	7点	25点
		%		63.0%	7.4%	6.5%	23.1%
男子 準優勝	パナソニック パンサーズ	点数	107点	69点	8点	6点	24点
		%		64.5%	7.5%	5.6%	22.4%
女子 優勝	JT マーヴェラス	点数	112点	78点	11点	6点	17点
		%		69.6%	9.8%	5.4%	15.2%
女子 準優勝	岡山シーガルズ	点数	94点	65点	4点	1点	24点
		%		69.1%	4.3%	1.0%	25.5%

部分でもボールヒットが許され、多くの場合、選手は手または腕でボールをヒットするが、その際、「ボールをつかむ、または投げる」とは「キャッチ」の反則であり、「一人の選手が連続してボールを2回ヒットすること」は「ダブルコンタクト」の反則となる¹⁰⁾。このように、ボールヒットに関しては、バドミントンなどと比較すれば、「相手コートへの返球までにボールヒットが3回まで許容されている」というチーム内での攻撃へのトランジションがしやすく、徐々に攻撃力を高めることが可能となっている点が特徴的であるが、バスケットボールなどと比較すれば、選手が「ボールをつかんだり、投げたりできない」「2回連続して触れない」、つまり、ボールを保持できないために、常に瞬間的な判断を求められる点が特徴的である。また、バレーボールの語源でもある「ボレー (volley)」とは、「ボールが地面(床)に着く前に打つこと」であるが、バレーボールではボールをキャッチすることがルールで禁止されているため、自コートにボールを落とさないように、また相手コートにボールを落とすように、ボールを「つなぐ」「弾く」「打つ」ことが求められる²⁴⁾。

ネットを挟んで相対する2つのチームが、相手コートにボールを落とすことを目指すアタックによる攻防を繰り返し、ラリーに勝つことで得る得点を争う

「ネットを挟んで相対する2つのチームが、相手コートにボールを落とすことを目指す」こと、および「ラリーに勝つことで得る得点を争う」ことは、バドミントンなどのネット型スポーツに共通する特性である。つまり、バレーボールは、トランジションの最終局面でのスパイクによって相手コートにボールを落とすことを目指すチーム同士の対戦なのである。そして、「アタックによる攻防を繰り返し」の部分がある他のスポーツとは異なる、バレーボールの独自性である。アタックとは、サーブとブロック以外の相手コートへの返球であり、多くの場合、スパイクが用いられる^{脚注6)}。筆者は、このアタックにみられる「スパイク」をバレーボールの「シボリック運動形態」とする。その理由は、バレーボールのゲームでは、スパイクによる得点が最も多く、象徴的な運動形態といえるからである。

バレーボールのゲームにおいては、勝つためには5セットマッチのゲームの場合、3セットを先取る必要がある、1つのセットを取るためには最低2点をリードし、先に25点を得る必要がある、1点を得るためにはラリーに勝つ必要がある。つまり、バレーボールのゲームは、他の球技と同様に得点を競い合うのであり、得点に関わるプレーが重要といえる。従って、得点を取るためのプレーがその競技の象徴的な運動形態といえるが、例えば、国内トップリーグであるVリーグの2019-20シーズンの男女ファイナル2ゲームにおける4チームの総得点に対するアタック得点の割合は63.0%から69.6%であった^{脚注7)}ように、実際のゲームにおいてアタック得点のほとんどがスパイクによる得点であるため、スパイクがバレーボールのゲームにおいて最も象徴的な運動形態といえる。

また、バレーボールの場合、テニスとは逆に、サーブサイドチームに得点の不利があるという競技特性もある。ラリー開始であるサーブの後に、先にアタック(攻撃)できるのはレセプションサイドチームであり、レセプションサイドチームに得点の優位性が認められている^{17) 23) 脚注8)}。従って、バレーボールにおける「ブレイクポイント」とはサーブサイドチームの得点を指し、確率通りにレセプションサイドチームが得点することを「サイドアウトポイント」という。

VI. おわりに

本研究の目的は、教材開発研究の前提として、バレーボールとはどのような競技特性を有するスポーツであるかという本質的課題を明らかにすることであり、「バレーボール

脚注6) バドミントンなどでみられる攻撃的な返球(強打)はスマッシュと呼ばれる。バレーボールでもバランススマッシュ(伸ばした腕を回転させて打つスパイク)という打ち方がある。

脚注7) 表1は、2019-20 V.LEAGUE DIVISION1 MENファイナルおよび2019-20 V.LEAGUE DIVISION1 WOMENファイナルの公式記録B試合結果速報を参考に、総得点に対するアタック得点などの割合を算出するために筆者が作成したものである。男子ファイナルは、セットカウント3-2で、ジェイテクトSTINGSがパナソニックパンサーズを破り優勝、女子ファイナルは、セットカウント3-2で、JTマーヴェラスが岡山シーガルズを破り優勝した^{1) 5)}。

脚注8) 小川研究では世界大会を対象とし、高根研究では静岡県高校生県大会を対象としてレセプションサイドチームの得点の優位性を明らかにした。

独自の競技特性は何か」を明示することであった。バレーボールの競技特性をあらわすバレーボールの定義は、以下であった。

バレーボールは、相手コートへの返球までに許容されるチーム内における3回以内のヒットという制限の中で、ネットを挟んで相対する2つのチームが、相手コートにボールを落とすことを目指すアタックによる攻防を繰り返す、ラリーに勝つことで得る得点を争うスポーツである。

定義においては、「種差」として、他のネット型スポーツと共通する特性も入れつつ、バレーボール独自の競技特性としては、攻守のトランジションを可能とする、相手コートへの返球までにヒットが3回まで許容されていること、また、その返球そのものとしてのアタックを挙げた。そして、バレーボールのシンボリック運動形態としては、代表的なスコアリングスキルである「スパイク」を挙げた。

今後の課題としては、バレーボールの教材化に向けた構造的把握、すなわちバレーボール構造における三契機に関する詳細な考察と、バレーボールの競技特性を体現化する教材開発、学習プログラム開発が挙げられる。

【註】

註1) CiNiにおいて、「バレーボール 特性」で論文検索を行ったところ、2020年12月1日現在、155件がヒットした。しかし、そのほとんどが「競技者の身体特性や心理的特性」などを対象とした研究であり、本研究のように競技特性そのものを対象とした研究は、唯一、新保による「教科体育におけるバレーボール特性論の再検討」²¹⁾ だけであった。この新保研究は、バレーボールの特性を「相対するチームがボールを相手コートに落とすための攻防を繰り返し勝敗を競い合うこと」とし、「それがそのまま教科体育における目標となり、その目標にしたがってバレーボールが『教材化』され、生徒たちに与えられているという点」を問題視し、「教科体育におけるバレーボールにおいて追求される特性」とは何かを考察し、「教科体育においてバレーボールを教材として取り上げるうえで必要とされる『運動の特性』抽出のための新たな視点を提示することを目的とする」研究であり、「バレーボール教材化のための特性論」を考察する研究であった。新保研究は、バレーボールとはどのような競技特性を有するスポーツであるかという本質的課題を考察対象とする本研究にとって、大いに示唆を与える研究ではあるが、バレーボールの競技特性そのものを深く追究するものでは

ない。このように、「バレーボールの競技特性」は未だ十分に検討されていない研究課題であり、本研究では、「バスケットボールの競技特性」を対象とした内山研究を参考にしつつ、考察を進めたい。

註2) 佐藤は「スポーツは文化である」という表現を用いているが、「スポーツは文化の下位概念(種)である」という意味であることは言を俟たない。佐藤と同じように、スポーツを「文化」の下位概念(種)としている研究者としては、友添が挙げられ、「スポーツとは何か」の結論として、「スポーツとは18世紀中ごろから19世紀末までの近代という特殊な時代に、最初はイギリスで、その後引き続いてアメリカという限定された地域に生まれた、独自の論理(資本の論理、自由競争の論理、平等主義の論理、禁欲的な倫理観、モダニズム)を内包した、大筋活動と競争を伴った身体運動に関わる独特の形式をもった文化」としている²⁵⁾。友添によるスポーツの定義における特徴は、スポーツの生まれた時代と地域を入れていることである。一方で、スポーツを「活動」の下位概念(種)としている研究者としては、樋口、久保が挙げられる。樋口は、「スポーツを遊戯性、組織性、競争性、身体性によって特徴づけられる活動」とし、「スポーツとは、日常生活とは異なる意味連関をもつ特殊な情況のなかで(遊戯性)、人為的な規則にもとづき(組織性)、他人との競争や自然との対決を含んだ(競争性)、身体的活動(身体性)である」としている¹⁾。久保は、スポーツ哲学者キーティングの考えに従って、スポーツをふたつに分け、スポーツ(S = sports)は、楽しみ(enjoyment)に方向付けられた活動であり、スポーツ(A = athletics)は、勝利(winning)に方向付けられた活動であるとしている¹¹⁾。

ところで、「スポーツとは何か」というスポーツの本質的な概念的検討はそれだけで大きなテーマであり、上述したようにスポーツの類を「文化」や「活動」とするなど、研究者間で意見が分かれており、現状、結論は出ていないといえる。しかしながら、本研究では、バレーボールを研究対象とし、その類としてスポーツを用いるため、筆者の立場を明らかにする必要がある。例えば、最新スポーツ科学事典では、「スポーツとはルールに基づいて身体的能力を競い合う遊びの組織化、制度化されたものの総称(略)遊戯性、競争性、身体活動性、歴史性という4つの要素によって特徴づけられる文化形象」³⁾とされており、類として「文化形象」が用いられている。文化とは、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」²²⁾であり、人間が作り出したも

のの総称である。佐藤の言葉を借りれば、まさに「人為的構成体」である。従って、本研究では、スポーツの類を「文化」とし、文化的特徴を有するものとした。ちなみに、スポーツ基本法では、その前文において、「スポーツは、世界共通の人類の文化である。スポーツは、(略)個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動(略)」¹³⁾ であるとしており、スポーツを「文化」の下位概念(種)とも、「活動」の下位概念(種)ともしている。

註3) 本研究では、差異論的アプローチを研究方法として採用し、具体的には「同の中に異をみる」という方法としたが、それは、佐藤の「当該の概念を把握するためには、階層性に関する縦軸と並立性に関する横軸とにおける『差異 differentia』に、配慮しなければならない」という指摘によるものであった。さらに、佐藤が、『生物—動物—哺乳類—人間—……』といった概念の系列は、階層性を軸とする差異によるものであり、『哺乳類—爬虫類—鳥類—魚類—昆虫類—……』といった系列は、並列性を軸とする差異によるものである。概念の把握は、こうした縦横二軸の差異を念頭におくことで、組織的な遂行が可能²⁰⁾ となるとしたため、内山も「バスケットボールにとって『固有なもの』とは何かを明らかにする」ために、「1つには、他種目と比してその差異を際立たせている特徴として(並立性という観点からの横軸における『差異性』)、2つ目には、バスケットボールという競技において同一であるとする特徴として(階層性という観点からの縦軸における『差異性』)、それぞれに共通するものがどういったものであるかを分析すれば」可能となるとし、「縦軸と横軸から成る『差異論的アプローチ』という方法を採用した³⁰⁾。従って、本研究では、「階層性という観点からの縦軸における『差異性』からバレーボールとその類概念(スポーツ)との関係を考察し、また、「並立性という観点からの横軸における『差異性』からバレーボールとその同位概念(バドミントンやバスケットボールなど)との関係を考察する。そして、「同の中に異をみる」、つまり、「類における共通部分を把握しながら、同位概念との差異を種差として指摘する」という研究方法によって、バレーボール独自の特性は何かという本質的課題を提示することを目指す。

註4) 本研究において、バレーボールの競技特性を考察するにあたり、競技規則と教本を参考にした。まず、競技規則では、400字程度で「バレーボール競技の特性」¹⁰⁾ を提示しており、段落ごと簡単にまとめ

れば、以下となる。「①バレーボールは、ネット型チームスポーツであり、様々な様式がある。②試合の目標は返球であり、そのために3回のヒットが許容されている。③サーブによってラリーが始まる。④ラリーに勝つと得点を得る。ローテーションがある」。上述したように、競技規則は、FIVBより公表されたものをJVAが翻訳した日本語版であるため、この「バレーボール競技の特性」は世界共通の内容である。しかしながら、冒頭の「バレーボールは、ネットによって分けられたコート上で、2つのチームにより行なわれるスポーツである」という言明だけでは、バスケットボールの特性を提示することに成功しなかったかつてのバスケットボール教本の場合と同様に、「他の競技(同位概念)との差異」が不明瞭なままである。もちろん、それ以降の部分で諸特性を説明しているが、本研究では、それをより簡潔かつ明確な表現を目指す。次に、バレーボールの教本では、1200字程度で「ゲームの特性」²⁴⁾ を提示しており、段落ごと簡単にまとめれば、「①バレーボールは、ネット型チームスポーツであり、様々な様式がある。②ゲームの構成(セットおよび得点、スコアリングシステム)。③ボールヒットの特性(ボレー、キャッチおよびダブルコンタクトの禁止)。3回までボールヒットが許容されているために攻撃パターンが多様である。④ラリーの開始および完了と得点。ブレイクとサイドアウト。⑤ローテーションおよびコートポジションによる制限。」である。この項を担当した高根は、当時の競技規則(2016年度版)の「バレーボール競技の特性」を参考にして、この「ゲームの特性」を執筆したために、同じような構成および内容となっている。本研究ではバレーボールの競技特性の提示を行うが、その際、「バレーボールにおける定義」を試みることで、より簡潔かつ明確に「同位概念との差異」を提示したい。ちなみに、教本の冒頭では、公益財団法人日本バレーボール協会会長の木村が、「スポーツ文化の中でも、バレーボールはネット競技の中で唯一、仲間とともに力を合わせてボールをつなぎ、「心をつなぐ」素晴らしいスポーツ」⁷⁾ としており、バレーボールの類を「スポーツ(文化)」あるいは「ネット競技」としつつ、種差として「つなぐ」ことを挙げているが、「心をつなぐ」は感性的契機の一つとして捉えられるものである。

Ⅶ. 引用・参考文献

- 1) 樋口聡. スポーツの美学. 不昧堂出版. 1987. p. 23, p. 31.
- 2) 樋口聡. 多面体としてのスポーツ. 友添秀則(責任編集).

- 現代スポーツ評論 20. 創文企画, pp. 68-79. 2009.
- 3) 一般社団法人日本体育学会〈監修〉. 最新スポーツ科学事典. 平凡社. 2006. p. 448.
 - 4) 一般社団法人日本バレーボールリーグ機構. バレーボール V リーグオフィシャルサイト: 記録・ランキング: 公式記録: V1 男子 (プレミア男子): 2019-20 V.LEAGUE DIVISION1 MEN: ファイナル: 公式記録 B. <https://www.vleague.jp/form/b/25708>. (参照日 2020 年 12 月 1 日). 2020a.
 - 5) 一般社団法人日本バレーボールリーグ機構. バレーボール V リーグオフィシャルサイト: 記録・ランキング: 公式記録: V1 女子 (プレミア女子): 2019-20 V.LEAGUE DIVISION1 WOMEN: ファイナル: 公式記録 B. <https://www.vleague.jp/form/b/25704>. (参照日 2020 年 12 月 1 日). 2020b.
 - 6) 河合学. バレーボール用語の定義と解説. 公益財団法人日本バレーボール協会〈編〉. コーチングバレーボール (基礎編). 大修館書店. pp. xviii-xix. 2017.
 - 7) 木村憲治. はじめに. 公益財団法人日本バレーボール協会〈編〉. コーチングバレーボール (基礎編). 大修館書店. p. iii. 2017.
 - 8) 公益財団法人日本バドミントン協会. 公益財団法人日本バドミントン協会ウェブサイト: 協会概要: 競技ルール: バドミントン競技規則. https://www.badminton.or.jp/rule/docs/rule_20200617.pdf. (参照日 2020 年 12 月 1 日). 2020.
 - 9) 公益財団法人日本バスケットボール協会〈編〉. バスケットボール指導教本改訂版 [上巻]. 大修館書店. 2014. p. 42.
 - 10) 公益財団法人日本バレーボール協会審判規則委員会〈編〉. バレーボール 6 人制競技規則. 公益財団法人日本バレーボール協会. 2020. p.17, pp. 53-55.
 - 11) 久保正秋. 体育・スポーツの哲学的見方. 東海大学出版会. 2010. p. 12.
 - 12) 増村雅尚. スパイク. 公益財団法人日本バレーボール協会〈編〉. コーチングバレーボール (基礎編). 大修館書店. pp. 153-161. 2017.
 - 13) 文部科学省. 文部科学省ホームページ: スポーツ: スポーツの振興: スポーツ基本法: スポーツ基本法 (平成 23 年法律第 78 号) (条文). https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm. (参照日 2020 年 12 月 1 日). 2011.
 - 14) 文部科学省. 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 保健体育編. 東山書房. 2018. p. 24.
 - 15) 文部科学省. 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 保健体育編 体育編. 東山書房. 2019. p. 21.
 - 16) 日本バレーボール学会〈編〉. Volleypedia バレーベディア [2012 年改訂版]. 日本文化出版. 2012. p. 100.
 - 17) 小川宏・黒後洋. ラリーポイント制によるバレーボールゲームの勝利確率—シミュレーション値と実際値の比較から—. バレーボール研究. 7 (1). pp.7-13. 2005.
 - 18) 佐藤臣彦. 体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察. 体育原理研究. 22. pp.1-12. 1991.
 - 19) 佐藤臣彦. 身体教育を哲学する. 北樹出版. 1993.
 - 20) 佐藤臣彦. 体育学・スポーツ学における人文的研究の方法. 体育の科学. 45 (1). pp.66-71. 1995.
 - 21) 新保淳. 教科体育におけるバレーボール特性論の再検討. 静岡大学教育学部研究報告 (教科教育学篇). 26. pp.165-178. 1994.
 - 22) 新村出〈編〉. 広辞苑第 7 版 机上版. 岩波書店. 2018. p. 2613.
 - 23) 高根信吾 他. バレーボールのラリーポイントシステムにおける得点に関する研究—高校チームの静岡県大会を対象にして—. バレーボール研究. 15 (1). pp.8-15. 2013.
 - 24) 高根信吾. バレーボールの特性. 公益財団法人日本バレーボール協会〈編〉. コーチングバレーボール (基礎編). 大修館書店. pp. 10-15. 2017.
 - 25) 友添秀則〈編著〉. スポーツのいまを考える. 創文企画. 2008. p. 11.
 - 26) 内山治樹. スポーツにおける戦術研究のための方法叙説. 体育学研究. 52. pp.133-147. 2007.
 - 27) 内山治樹. バスケットボールの競技特性に関する一考察: 運動形態に着目した差異論的アプローチ. 体育学研究. 54. pp.29-41. 2009a.
 - 28) 内山治樹. 競技力の概念的把握への方法序説. 体育学研究. 54. pp.161-181. 2009b.
 - 29) 内山治樹. バスケットボールにおけるルールの存在論的構造: 競技力を構成する知的契機としての射程から. 筑波大学体育科学系紀要. 35. pp.27-49. 2012.
 - 30) 内山治樹. 哲学. 内山治樹・小谷究〈編著〉. バスケットボール学入門. 流通経済大学出版会. pp.149-170. 2017.